高鍋町教育研究所

Ⅰ　研究主題と副題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２－４－１

Ⅱ　主題設定の理由　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２－４－１

Ⅲ　研究仮説　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２－４－２

Ⅳ　研究組織　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２－４－２

Ⅴ　研究内容

　１　確かな学力についての基本的な考え方　・・・・・・・・・・・　２－４－３

　２　研究の実際

　　（１）　教師及び児童生徒の姿

　　　ア　教師の実態　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２－４－４

　　　イ　児童生徒の実態　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２－４－４

　　（２）　研究所からの発信

　　　ア　４校合同研修会の実施　・・・・・・・・・・・・・・・　２－４－６

　　　イ　研究所便りの発行　・・・・・・・・・・・・・・・　２－４－６

　　　ウ　学力向上リーフレット（目指す高鍋っ子の姿）の作成・　２－４－７

　　（３）　確かな学力育成のための授業づくり

　　　ア　高鍋町の授業モデル　・・・・・・・・・・・・・・・　２－４－７

　　　イ　新学習指導要領に対応した授業実践レポート・・・・・　２－４－９

　　　ウ　ビデオを使った授業検討　・・・・・・・・・・・・・・　２－４－９

Ⅵ　研究の成果と課題　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２－４－１０

Ⅶ　終わりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２－４－１０

○　引用・参考文献

○　研究同人

Ⅰ　研究主題と副題

主体的に学び、確かな学力を身に付けた児童生徒の育成
～「できる！・わかる！」を大切にする授業づくりを通して　～

Ⅱ　主題設定の理由

１　学力向上の目的

最近、アクティブラーニングバブルという言葉を耳にするようになった。アクティブという言葉により指導形態や活動が優先され、子どもの質の高い学びや深い学びが実現できていない授業が増えてきたからである。例えば、グループ学習でお互いの伝え合いが上手くいかず学習内容が深まらない授業、思考しなくてもわかるような簡単な学習課題が設定され学習意欲を喚起できない授業、基礎的な知識が十分に押さえられないまま発展的な学習に進む授業など、本来のアクティブ・ラーニング（以後ＡＬと記載）で身に付けさせたい学力と程遠い授業になっている。では、これから必要とされる学力とはどんなもので、なぜ学力向上に取り組むことが、教育現場で最優先課題とされているのだろうか。

２０１５年、オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン准教授とカール・ベネディクト・フレイ博士が、今後１０年～２０年の間に、米国の総雇用者総数のうち約４７％の仕事がコンピュータにとって代わられる可能性が高いと予測した。AI（人工知能）を中心とした情報技術の進歩は目覚ましく、これからの社会を生きていくためには、「どんな能力があるのか」「何ができるのか」が重視されてくる。中央教育審議会でもこれからは知識基盤社会の時代ととらえ、グローバル化が急速に進展するなか、我が国の知識基盤社会の構築を目指している。その知識基盤社会において必要な学力が PISA 型学力である。PISA 型学力は、「知識や技能を活用する能力があるか」ということであり、知識や技能の習得からその活用を目指している。では、何のために知識や技能を活用する能力が必要なのだろうか。

OECD の DeSeCo(デセコ)プロジェクトは、PISA 調査などに根拠をあたえようとする試みとして、２００３年に最終報告を出した。その成果を「キー・コンピテンシー（主要能力）」としてまとめている。そのなかで学校教育に限定されがちな学力を、より大きな枠組みで考え直している。学力は個人と社会の双方に利益をもたらすものという前提にたって、価値ある個人的・社会的成果をもたらす能力であると定義している。そのため単に知識や技能を身に付けるだけでなく、個人と社会のために活用することが求められている。つまり学力向上の最終的な目的は、自分自身と自分の生きる社会全体を幸せにすることなのである。

２　児童生徒の実態及び昨年度までの研究

現在、本町の小中学校は生徒指導上の大きな問題はなく、比較的落ち着いた状態で日々の授業が行われている。平成２８年度の全国学力状況調査の結果から、小学校の国語Ａ以外はすべて全国平均を下回っており、更に記述式のような活用する力が不足していること、基礎的・基本的な力が身に付いておらず、学力下位層の割合が高いことなどの課題が浮き彫りになった。平成２９年度の結果を見ると、Ａ問題はすべての小中学校で全国平均を上回っており、各学校での学力向上の成果が伺われる。ただし、思考力、判断力、表現力を問うＢ問題においては、依然として全国平均を下回っている学校が多かった。

平成２８年度は学力向上の研究テーマに取り組んだ初年度であり、研究主題（副題）「主体的に考え、豊かに表現できる児童生徒の育成（各教科における取組を通して）」のもと、次の３つの視点で研究を行った。一つ目はＡＬの理論研究である。アメリカ国立訓練研究所の調査結果（授業で学習した内容を半年後にどの程度記憶しているか）では、講義がわずか５％に対して、体験する＝７５％、他の人に教える＝９０％のように、インプットした学習内容をアウトプットする大切さが確認できた。二つ目は全国学力状況調査の分析、そして、三つ目はＡＬの視点を取り入れた授業実践である。各教科の取組を授業実践レポートにまとめたり、算数・数学科の研究授業を行ったりするなどの実践的な研究に取り組んだ。取組の中でＡＬをより深い学びに深化させるためには、基礎的・基本的な知識や技能を身に付けさせた

うえで、自分の意見を他者にしっかり伝える練習を重ねる必要があるとの課題が見つかった。そこで、昨年度の反省を踏まえながら、今年度はＡＬをより深化させた主体的・対話的で深い学びの研究に取り組むことにした。

３　本年度の研究の方向性

学力向上の最終的な目標を個人及び社会全体の幸せと考え、その意味も含めて確かな学力を身に付けさせることにした。学習指導要領が示す確かな学力とは、知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学習意欲の養成の三つである。今回は東京都の町田市教育委員会が示した「町田っ子に身に付けさせたい確かな学力」を参考にし、「できる学力」と「わかる学力」を明確にして研究を進めていくことにした。また、主体的・対話的で深い学びについては、次世代型教育推進センターが提唱する主体的な学び、対話的な学び、深い学びに向かう児童生徒の姿を念頭において授業づくりを行うことにした。その成果をもとに、高鍋町ならではの授業モデルづくりに取り組み、最終的に、本研究所の研究が本町すべての児童生徒の学力向上に寄与することを目指した。上記のような考え及び実態をもとに、学力向上（２年次）の研究を進めていく際、次の３つのことに配慮した。

- 教師や児童生徒の実態を十分に把握し、日々の授業に活用できるものとする。
- 研究所内の研究にとどまらず、本町すべての教師及び児童生徒に役立つものとする。
- 特別に研究授業を行わず、研究員全員の日頃の授業を検証し、課題や悩みを共有する。

目標実現のために、宮崎県教育委員会が提唱している「学力向上の３本の矢」を研究内容の柱として取り組むこととした。本町が進めた研究内容は、以下の通りである。

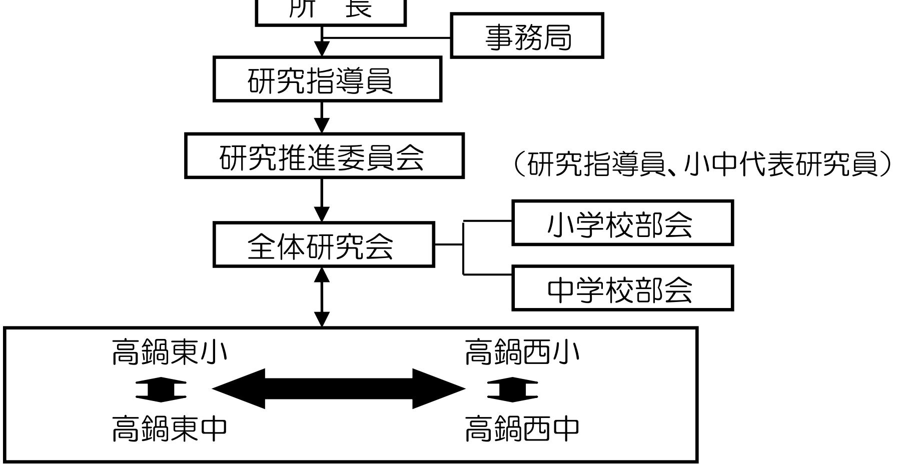
県教育委員会の３本の矢	本町の研究の柱	研究内容
確実な実態把握と分析	教師及び児童生徒の姿	全国学力状況調査・みやざき学習状況調査の分析、研究員・児童生徒の意識調査
組織的な対応の充実	研究所からの発信	４校合同研修会、研究所便り・学力向上リーフレットの作成
授業づくりの意識改革	確かな学力育成のための授業づくり	高鍋町の授業モデル、新学習指導要領に対応した授業実践レポート、ビデオを使った授業分析

このような取組を通してお互いの悩みや課題を共有しながら具体的な成果をあげることを目指して、本主題を設定した。

Ⅲ　研究仮説

教師や児童生徒の実態を十分に把握し、「できる学力」と「わかる学力」を明確にした授業づくりを組織的に行うことで、児童生徒は主体的に学び、確かな学力を身に付けることができるであろう。

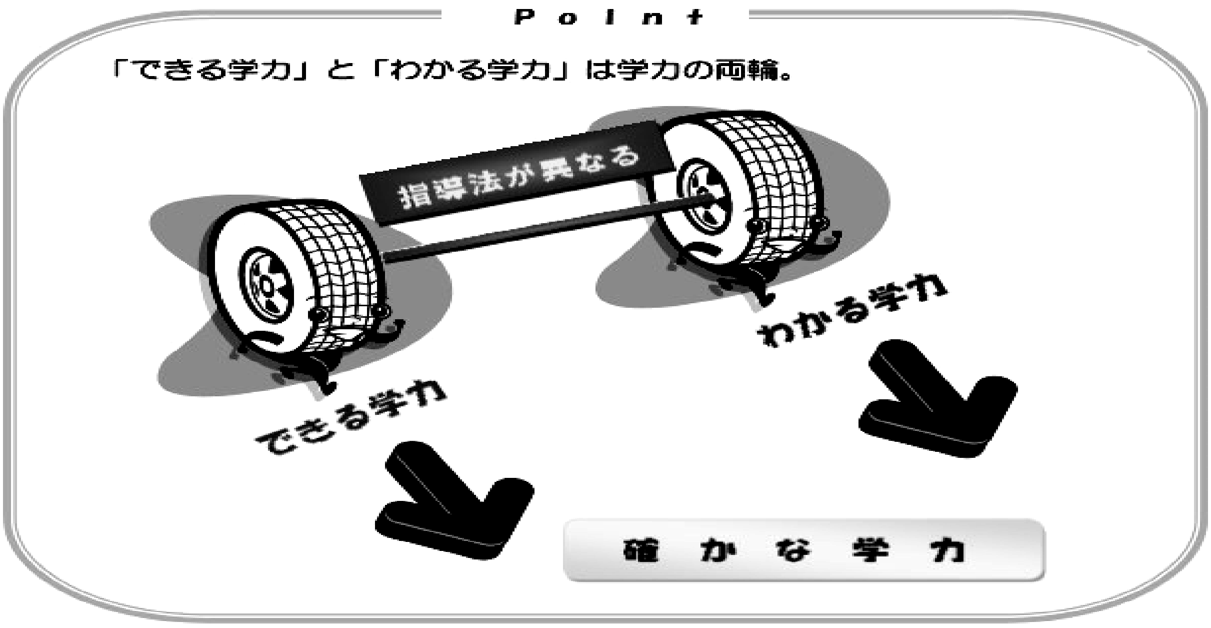
Ⅳ　研究組織



Ⅴ　研究内容

１　確かな学力についての基本的な考え方

文部科学省は確かな学力として、次の３つを規定している。①基礎的・基本的な知識及び技能　②思考力、判断力、表現力　③主体的に学習に取り組む態度の３つである。確かな学力という言葉は教育現場に定着しているが、果たしてどのような学力を身に付けさせれば良いのか漠然としている部分がある。そこで、今回は東京都の町田市教育委員会の取組を参考にすることにした。町田市の取組【図１】では確かな学力を「できる学力」と「わかる学力」に分けて考えており、それぞれの学力を育成する方策を具体的に示している。「できる学力」を基礎・基本とし、習熟を図るために学習を充実させる。「わかる学力」を思考力・判断力・表現力とし、協同的探究学習の推進を目指している。「できる学力」と「わかる学力」をバランスよく育てるという観点から、一つの学習単元において、２つの学力の授業をバランスよく組み合わせることを提案している。町田市教育委員会は確かな学力を、次のように図式化している。

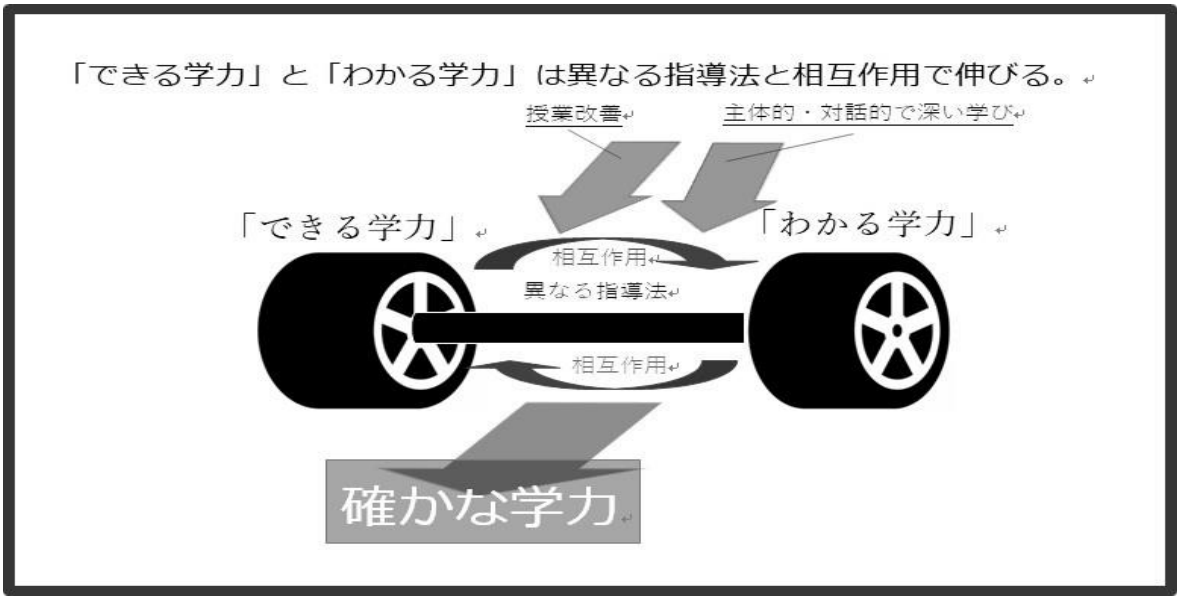


【　図１　町田市教育委員会の確かな学力　】※「まちだの教育」町田市教育委員会より

非常にわかりやすい図であり、「できる学力」のためにドリル的な反復学習を、「わかる学力」のためにグループ活動を重視した協同的な学び（教え合い）を推奨している。本町では町田市教育委員会の考え方を参考にしながら、確かな学力を考えてみた。協同的な学びを提唱している佐藤学氏は学びについて次のように述べている。

> 一般に学びは「基礎」から「発展」へと進むと言われている。≪中略≫低学力の子どもは「基礎」の段階でつまずいてしまう。それでは低学力の子どもはどこで学んでいるのだろうか。≪中略≫低学力の子どもは基礎的知識を活用する学びにおいて、「これはこういうことだったのか」と「基礎」を理解する光景が頻発していることに気づく。低学力の子どもは、「発展」から「基礎」に降りる学びを遂行しているのである。

子どもの学びは「できる学力」から「わかる学力」に移行するだけではなく、「わかる学力」から「できる学力」に移行する場合もある。確かな学力を定着させるには、学習過程において「できる学力」と「わかる学力」を何度も往復させることが必要である。二つの学力を密接に関係させながら学習を進めることで、学力差のある子ども達一人一人に確かな学力を身に付けさせることができる。教師自身がこのことを意識しながら授業を進めることが、学力向上へのポイントとなる。そこで、本町の考える確かな学力を【図２】のように図式化した。



【　図２　高鍋町が考える確かな学力　】

2　研究の実際

(1)　教師及び児童生徒の姿（教師及び児童生徒の実態を正しく理解しよう）

ア　教師の実態

今回の研究所のメンバー（８名）は、中堅・ベテラン教員が４名、若手教員が４名のバランスのとれた構成となっている。中学校の教科担当は、社会科が２名、数学科・理科がそれぞれ１名の計４名である。また、小学校では算数科を中心として研究を進めることにした。今年度、町内すべての小中学校のテーマ（主題研）が学力向上であり、研究所の研究内容とリンクさせることにより、町内すべての児童生徒に確かな学力を身に付けさせたいと考えた。

では、町内の教師は日々の授業においてどのような悩みを抱えているのだろうか。研究員へのアンケートから、次のような課題が浮き彫りになってきた。まず、一つ目は「多忙感」である。どの教師も児童生徒のためにより良い授業を行いたいと願っている。そのための教材研究や授業準備を入念に行いたいと考えているが、日々の業務に追われ時間的な余裕がない。また、教科書の教える内容が多く、指導体制を含め個別指導が充実できないとの声もあった。

二つ目は「学力差」である。学力テストの結果から、上位層と下位層の学力差が年々広がっていることがわかる。そのため、授業においてどのレベルに照準を絞って学習させるべきか悩んでしまう現実がある。家庭での学習環境の違いを含めて学力差が広がり、すべての児童生徒にとって満足できる授業を構成することが極めて困難な状況になっている。

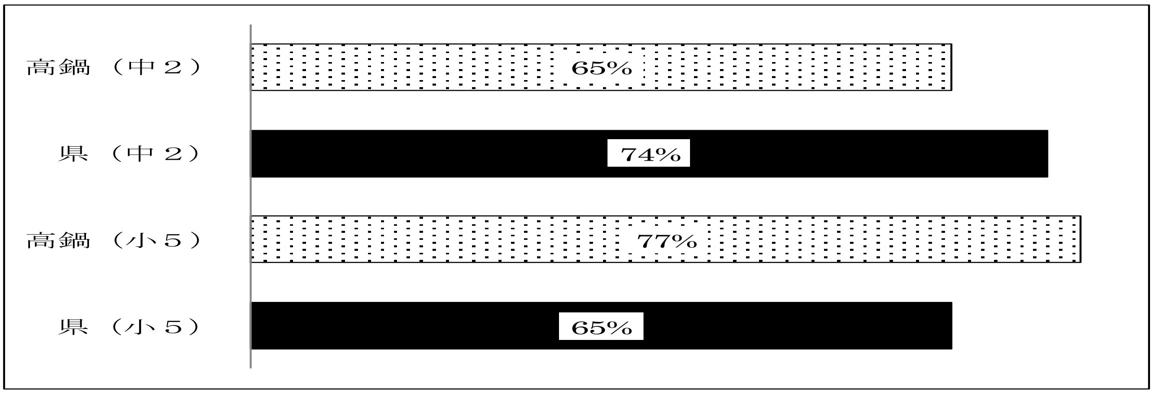
三つめは「授業づくり」である。日々、多忙感と学力差を感じる中で、毎時間の授業をどのように進めればよいのか。発問の仕方、資料選択、板書などの基本的な指導技術を身に付けるだけではなく、主体的・対話的で深い学び、協同的な学び、ICT の積極的な活用など、授業におけるハードルは年々上がってきている。このような状況の中で、町内の教師は真摯に学力向上に取り組んでいる。そのような教師を支援する意味からも、研究所の研究内容は一部の学校や教師しかできないような難解なものではなく、広く普遍性なものにする必要がある。

イ　児童生徒の実態

高鍋町の児童生徒の学習に関する意識はどうなっているのだろうか。学力向上の研究を進めるに当たって、高鍋西小、東小の５年生、西中、東中の２年生について、それぞれ１クラスを抽出して学習に関するアンケートを行った。その際、町内の児童生

徒の良さや課題を浮き彫りにするために、全国学力状況調査及びみやざき学習状況調査の意識調査と比較してみた。アンケートの一部を紹介する。

【　表１　一日１時間以上家庭学習する児童・生徒の割合（平日の場合)】



小学校５年生においては県平均よりも１０％程度高い数値であり、逆に中学校２年生は県平均よりも１０％程度低い数値となっている。小学校では宅習を保護者と一緒にやる影響があると考えられる。また、休日に１時間以上勉強する割合は、小学５年生は７９，６％（県平均５６，７％)、中学２年生は７８，０％（県平均７８，８％）となっており、小学校では県平均よりも２０％程度高い数値であり、中学校ではほぼ同じ数値であることがわかった。

【　表２　学習に対する姿勢や考え方（肯定的な回答の割合）　】※（　）は宮崎県の結果

質問内容	小学５年生　%	中学２年生　%
A　授業中、発表することがありますか？	70,0（80,0）	64,0（72,7）
B　授業中、友達と話し合うことがありますか？	85,0（82,0）	88,0（76,2）
C　授業中、ノートをていねいに書いていますか？	89,0（75,4）	85,0（78,5）
D　解き方がわからないとき、あきらめずに考えますか？	91,0（80,8）	89,0（66,5）
E　自分の考えを書くとき、考えた理由まで考えますか？	70,0（50,0）	69,0（31,6）
F　勉強したことを、普段の生活に生かせるか考えますか？	66,0（65,3）	56,0（42,4）

Ａ発表のみが県平均よりも数値が低く、小中学校ともにほとんどの項目で肯定的な回答が多い。Ｂ話し合い活動、Ｃノートでは、日々の授業において教師側が話し合いの場を多く設定し、ノート点検や書く指導を丁寧にしている成果だと思われる。また、Ｄ粘り強さ、Ｅ理由、Ｆ生活との結びつきの数値が高いことは大変良い傾向であるが、質問の意味が本当に理解できているか、児童生徒と教師の意識にずれはないかなど、検討すべき課題は残っている。

【　表３　学習における悩みや心配事　】※（　　）は全国（ベネッセの意識調査）の結果

悩み・心配事	小学５年生　%	中学２年生　%
Ａ　テストで満足できる点数が取れない	45,0（24,7）	63,0（52,7）
Ｂ　学習した内容をすぐに忘れてしまう	35,0（27,0）	50,0（40,4）
Ｃ　勉強に対してなかなかやる気が起きない	41,0（39,8）	49,0（55,6）

Ｃの中学生の回答以外、すべて全国平均を上回っている。小中学校ともに学習に対する悩みや心配事をたくさん抱えていることがわかる。そのため、Ａのようにテストの結果に満足していない児童生徒が多い。また、ＢＣのように学習内容がしっかり定着できておらず、学習意欲を喚起できていない点も課題として挙げられる。つまり、多くの児童生徒が「授業内容を十分に理解したい」「テストでよい点数を取りたい」と願っているが、思うような結果が得られていない現状がある。

高鍋町の場合、全国と比べると、塾や家庭教師による学習を受けている児童生徒の割合は極端に低くなっている。町も全面的に学習支援を行っているが、児童生徒の多くが学校の授業に頼っているのが現実である。このような実態を踏まえたうえで、児童生徒一人一人の個に応じた指導を考えていかなくてはならない。

(2) 研究所からの発信（研究内容を町全体に広げよう）

ア　４校合同研修会の実施【写真１】

研究所での研究内容を町内の児童生徒に還元するため、町全体に広げる必要がある。本町では毎年、町内の小中学校職員全員を対象に、４校合同研修会を実施している。（本年度は８月２日に実施）今回は昨年度のＡＬの取組を中心に、現在、学力向上に向けてどのように研究を進めているかを報告した。町全体で学力向上に取り組もうとする機運を高めることができた。また、平成３０年１月には、高鍋町ＰＴＡ研修大会に於いて、会員に今年度の取組を報告した。定期的な研修がそれぞれの校区で行われており、実践報告会などを通してお互いの情報を共有しようとする試みがなされている。

【 写真１ 合同研修会の様子 】

イ　研究所便りの発行【図３】

研究内容を記録として伝えるために、定期的に「研究所便り」を発行することにした。研究内容や授業の様子、アンケート結果などを具体的な数値を含めて、町内の教師及び保護者へ周知徹底してもらうことを目指した。今年度は３号までの作成を目指しており、現在、２号（Ａ４表裏で作成）までを発行することができた。

第１号 （９月発行）	（表）研究所のメンバー紹介、確かな学力の説明 （裏）高鍋町の子ども達の実態（アンケート結果より）
第２号 （１１月発行）	（表）「できる学力」、「わかる学力」の授業の紹介 （裏）学力向上リーフレット（目指す高鍋っ子の姿）の紹介

高鍋町の子ども達の実態は・・・。児童（小5）、生徒（中2）のアンケート結果より。

では、高鍋町の児童生徒は「学習」に対してどんな意識をもっているのでしょうか？高鍋西小、東小の5年生、西中、東中の2年生について、それぞれ1クラスを抽出してアンケートを行いました。宮崎県の数値はみやざき学力調査、全国の数値はベネッセの学習アンケート調査を参考にしています。その結果は次のようになりました。

○ 1日1時間以上家庭学習する児童・生徒の割合（平日）

	高鍋町 %	宮崎県 %
小学5年生	77	65
中学2年生	65	74

この結果を見ると、小学5年生は県平均よりも家庭学習の時間が長く、中学2年生は逆の結果となりました。休日の場合は、小学5年生、中学2年生ともに県平均を上回っており、高鍋町の子ども達の勉強時間がけっして少なくないことがわかりました。

○ 授業及び学習に対する姿勢や考え方（肯定的な回答の割合） ※（　）は宮崎県の平均 %

質問内容	小学５年生 %	中学２年生 %
① 授業中、発表することがありますか？	70,0(80,0)	64,0(72,7)
② 授業中、友達と話し合うことがありますか？	85,0(82,0)	88,0(76,2)
③ 授業中、ノートをていねいに書いていますか？	89,0(75,4)	85,0(78,5)
④ 解き方がわからないとき、あきらめずに考えますか？	91,0(80,8)	88,0(66,5)
⑤ 自分の考えを書くとき、考えた理由まで考えますか？	70,0(80,0)	69,0(31,6)
⑥ 勉強したことを、普段の生活に生かせるか考えますか？	66,0(65,3)	56,0(42,4)

①（発表）のみが県平均よりも数値が低くなっていますが、小中学校ともにほとんどの項目で「肯定的な回答」が多いことがわかります。このように授業や学習に対する意識が高くなっているのは、学校や家庭での指導がしっかり行われているからだと思われます。以上のように、高鍋町の子ども達の学習に取り組む姿勢は望ましい傾向にあり、その良さを生かした授業づくりを考えていく必要があります。

○ 学習における悩みや心配事 ※（　）は全国の平均 %

悩み・心配事	小学5年生 %	中学2年生 %
① テストで満足できる点数が取れない	45,0(24,7)	63,0(52,7)
② 学習した内容をすぐに忘れてしまう	35,0(27,7)	50,0(40,4)
③ 勉強に対してなかなかやる気が起きない	41,0(39,8)	49,0(55,6)

小中学校ともに、学習に対する悩みがある割合が全国よりも高くなっています。特に、テストの点数に満足していない中学生が6割以上もいます。

上記のアンケート結果やみやざき学力、全国学力テストの結果を分析して高鍋町の実態に合った「学力向上」の在り方を研究しています。

更に子ども達のためになる研究を進めていきます。

今回は研究所が「学力向上」について取り組んでいる研究の概要、そして高鍋町の子ども達の実態をアンケート調査の結果からお伝えしました。今後、学力向上のための授業実践や授業モデルを提案していこうと考えています。「学力向上」のお悩みや本研究所への研究内容に対して、御意見、御質問がある場合は、kenkyujo@town.takanabe.lg.jp（高鍋町教育研究所）までメールをお願いいたします。

【 図３ 研究所便り１号の裏面 】

【 図４ 学力向上リーフレット 】

ウ　学力向上リーフレット（目指す高鍋っ子の姿）の作成【図４】

学力向上のため、どのような姿勢で学習に取り組ませればよいのかを具体的に示すため、たかなべの頭文字で始まる「目指す高鍋っ子の姿」をリーフレットとして作成した。「た達成感を味わう子ども」、「か家庭学習をコツコツとがんばり続ける子ども」、「な仲良く話し合い教え合う子ども」、「べ勉強に進んで取り組む子ども」の４項目である。町内すべての小中学校の教室にポスター（Ａ３版カラー）として掲示した。また、各家庭の理解を深めるために、第２号の研究所便りに掲載した。今後、参観日等、いろいろな場面で保護者に周知徹底を図り、しっかりと学習に取り組む高鍋の子ども達を育成していきたい。

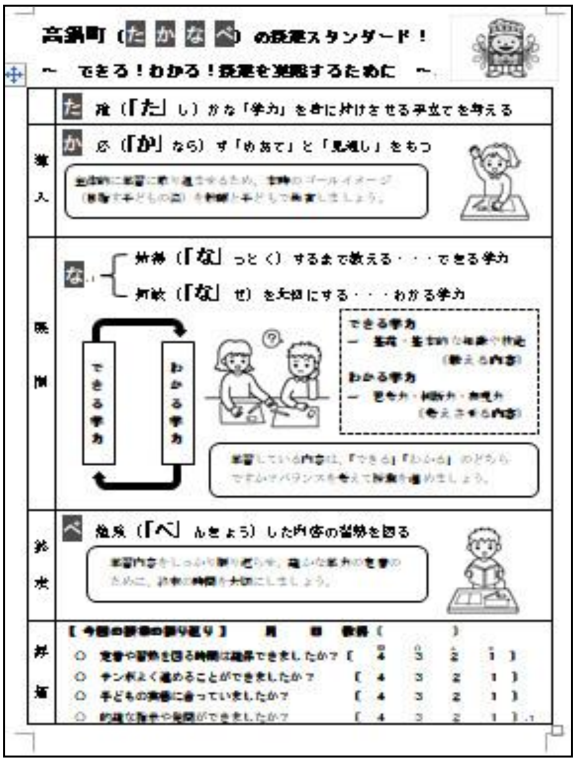
(3)　確かな学力育成のための授業づくり（「できる！・わかる！」授業を実践しよう）

ア　高鍋町の授業モデル【図５】

確かな学力を育成するために、たかなべの文字を使った本町独自の授業モデルを研究員全員で意見を出し合いながら作成していった。

高鍋東小の授業モデル、研修センターの授業モデル等を参考にしながら、小中学校及びどの教科においても活用できる普遍性の高い、よりシンプルなスタイルを目指した。

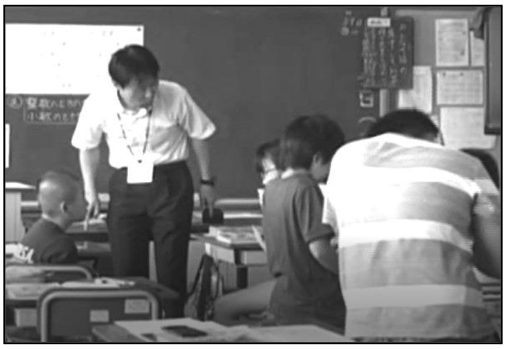
教師が「た確かな学力を身に付けさせる手立てを考える」ため授業を３つの段階に分けた。まず導入においては、児童生徒に本時の学習の流れをつかませるために「か必ずめあてと見通しをもつ」とした。次に展開の場面においては、「できる学力」と「わかる学力」を明確にして、本時のねらいに沿った学習が展開できるようにした。基礎・基本的な知識や技能を習得させる場面では、「な納得するまで教える」とした。思考力・判断力・表現力を育成させる場面では、児童生徒の疑問を生かし、「ななぜを大切にする」とした。



【　図５　高鍋町の授業モデル　】

最後の終末の場面においては、本時の学習内容をしっかり定着させるために、ドリル的な問題や応用問題に取り組ませるために、「べ勉強した内容の習得を図る」とした。また、宮崎県教育委員会が推奨している授業のチェックポイント（４項目）を記載し、教師自身が簡単に授業を振り返ることができるように工夫してみた。この授業モデルは研究員がそれぞれの学校で説明し、今後、町全体で活用してもらおうと考えている。

次に、「できる学力」、「わかる学力」の授業の実践例を示してみる。



【 写真２ 小学５年生 算数の授業 】

【 写真３ 中学２年生 社会の授業 】

○　「できる学力」の授業実践例　【写真２】【写真３】

・　学年及び教科（　小学５年算数　）　・　単元名（　式と計算　）
・　めあて（　整数の時のきまりが、小数でも成り立つかを調べよう　）
・　整数の時のきまりが、小数でも成り立つことを確認した後で、ペアで例題を解いて解き方をお互いに発表する。わからない場合は、お互いに補足を加える。

・　学年及び教科（　中学２年社会　）　・　単元名（　世界のエネルギーと産業　）
・　めあて（　２０３０年のエネルギーミックスを考えてみよう　）
・　九州電力の方をゲストティーチャーとして、LED 電球が環境に優しい理由の説明を受ける。白熱電球と LED 電球を比較する実験を見て、具体的な数値とともに理解する。

「できる学力」は基礎・基本的な知識や技能のため、一般的に教師が説明するパターンが多い。今回の小学校算数においては、整数の時のきまりが小数でも成り立つということを確認したうえで、ペアで例題を使って発表している。中学校社会においては、なぜ東京都では無償で LED 電球と交換するのかという疑問を、専門家の説明を聴きながら解決していった。更に白熱電球と LED 電球の熱量を比較した実験を行うことで、より深い理解へと導くことができた。このように、様々な「できる学力」の授業パターンを工夫していった。

【 写真４ 小学３年生 算数の授業 】

【 写真５ 中学２年生 理科の授業 】

○　「わかる学力」の授業実践例　【写真４】【写真５】

・　学年及び教科（　小学３年算数　）　・　単元名（　分数　）
・　めあて（　水のかさの表し方を考えよう　）
・　水のかさを分数で表すにはどうすればよいかについて、２つの答えのどちらが正しいかをペアや全体で協議する。最終的に分数での正しい表し方を理解する。

・　学年及び教科（　中学２年理科　）　・　単元名（　生命を維持する働き　）
・　めあて（　人の心臓のつくりについて特徴をまとめよう　）
・　人と類似している豚の心臓を詳しく観察することで、気付いたことを付箋に記入する。最終的に観察結果を発表し合い、心臓のつくりの特徴を理解する。

「わかる学力」は思考力・判断力・表現力であり、一般的にグループ活動などが行われる場合が多い。ただ、授業のねらいが明確でない場合は、ただ意見を交換することにとどまってしまい、学習内容と学習活動が乖離してしまう恐れがある。今回の小学校算数においては、水のかさを分数で表すにはどうするかを考えることにより、間違いやすいポイントに気付き、最終的に分数での正しい表し方について理解することができた。

中学校理科においては、豚の心臓を班ごとに観察し、気付いたことを付箋にメモして KJ 法を使ってまとめていく。班活動や全体発表を通して意見を練り上げ、本時のねらいである人間の心臓の特徴を理解することができた。

このように「わかる授業」においては、活動ありきではなく、本時のねらいに到達させるための最適な学習方法を選択する必要がある。また、「わかる学力」と「できる学力」のバランスを考え、お互いの授業を効果的に組み合わせることで、確かな学力、そして、すべての児童生徒が満足できる授業を展開できる。

イ　新学習指導要領に対応した授業実践レポート【図６】

新しい学びの柱として、文部科学省が提唱しているのが「主体的・対話的で深い学び」である。ＡＬに代わってこの文言が使われるようになった経緯は、子ども達がただ活動的な学習を行うのでなく、授業者自身が学習活動の意味を理解することが強く求められているからである。次世代型教育推進センターでは、主体的・対話的で深い学びの項目を細分化して示している。そこで、研究員自らが授業を見直す意味も含めて、授業実践レポートに、これらの学びの項目を位置付けることにした。次世代型教育推進センターが示した学びの項目に、番号を付けて下記の表のようにまとめてみた。

１　主体的な学び　①　興味や関心を高める　②　見通しを持つ ③　自分と結び付ける　④　粘り強く取り組む　⑤　振り返って次へつなげる
２　対話的な学び　①　互いの考えを比較する　②　多様な情報を収集する ③　思考を表現に置き換える　④　多様な手段で説明する　⑤　先哲の考え方を手掛かりとする ⑥　共に考えを創り上げる　⑦　協同して課題解決する
３　深い学び　①　思考して問い続ける　②　知識・技能を習得する ③　知識・技能を活用する　④　自分の思いや考えと結び付ける　⑤　知識や技能を概念化する ⑥　自分の考えを形成する　⑦　新たなものを創り上げる

授業日	平成２９年　１０月１３日（金）	学級名	４年３組	教科名	算数科
単元名	面積	資料等	投影機		
目　標	○　面積の定義を知り、１㎠を単位にして、いろいろな形の面積を求めたり、面積を方眼紙上で作ったりする。				
主体的・対話的な深い学び	「興味や関心を高める」「共に考えを創り上げる」「知識・技能を習得する」				

授　業　の　流　れ	授業の様子　など
○　前時で学習した広さを比べる方法について復習する。１－① ○　課題を見て前時との違いを考える。　１－② ○　本時のめあてを確認する。　１－② 【めあて】「広さを数で表す表し方を考えよう。」 ○　本時の学習の流れを確認する。　１－② ○　自力解決を行う。　３－⑥　２－③ ・　自分で説明できるようにノートに答えを書く。 ○　ペアで意見交換を行う。　２－①　２－② ・　お互いに、説明を行う。 ○　全体の場で発表する。　２－③	 【相手に自分の考えを伝える】

【　図６　学びの項目を位置付けた授業実践レポート　】　※一部抜粋

小学４年生の算数科（単元　面積）では、本時のめあてを確認し、全体の場で発表するまでの流れにおいて、９つの学びの項目を示している。例えば、本時のめあてを確認する場面では、１－②（見通しを持つ）のように、１時間すべての学習活動に、学びの項目を当てはめていった。それぞれの学習活動の意義を再確認するだけではなく、教師自身が日々の授業において、主体的・対話的で深い学びを数多く実践していることに気付くきっかけとなった。

ウ　ビデオを使った授業検討【写真６】

【　写真６　授業分析のようす　】

今年度は研究員全員が自分の授業をビデオに撮り、その授業動画をもとに授業分析を行っていった。授業動画を流しながら、授業者がポイントを説明するやり方とした。大切な場面では、動画を止めて、子どもの様子を観察したり、授業者の発問や間のとり方などを協議したりした。

小学校、中学校それぞれの視点で意見を出し合うことで、更に協議を深めることができた。また、実際に授業を見ることで、自分の授業技術を見直す良い機会となった。

Ⅵ　研究の成果と課題　（成果：○　課題：●）

○　高鍋町の喫緊の課題である学力向上について、町田市教育委員会と宮崎県が推進している取組を重ねたことで、実践的な取組を行うことができた。

●　研究所の研究内容や取組について、各学校に伝達できたものの、すべての職員が実践するまでには至らなかった。今後、さらに各学校の主題研究とリンクさせていく必要がある。

○　全国学力状況調査・みやざき学習状況調査の結果分析や学習に対しての意識調査を行ったことで、児童生徒の実態に合った学力向上の研究を進めることができた。

●　本町の児童生徒の実態と課題を町内すべての教職員で共有し、具体的な変容がわかる継続的な取組が望まれる。

○　学力向上の取組を啓発するための「高鍋町教育研究所便り」や「学力向上リーフレット」を分担して作成し、町内すべての学校や家庭に配布し、啓発することができた。

●　各学校や家庭に啓発したことによる児童生徒の変容や成果を集約する必要がある。

○　高鍋町の「授業モデル」を研究員全員で作成し、「できる学力」と「わかる学力」の定義付けを図ったことで、どちらの学力を高めるかを意識した授業を展開することができた。

●　高鍋町の「授業モデル」と「主体的・対話的で深い学び」をどう結び付けていくのかを明確にしていく必要がある。

○　「授業モデル」や主体的・対話的な学びの項目に従い、授業の動画をお互いに視聴しながら協議し合うことで､児童生徒の実態や小中学校それぞれの課題を明確にすることができた。

●　小中学校どちらにおいても、使いやすい「授業モデル」にするため、更なる工夫や改善が必要である。また、各教科で確かな学力の定着を図る授業実践が求められる。

Ⅶ　終わりに

昨年度からの研究を引き継ぎ、研究指導員を中心に８名の研究員で学力向上の研究を進めてきた。日頃の授業をビデオに撮って研究会の中でお互いの授業を視聴し、小中学校の垣根を越えて日々の授業における課題や悩みを率直に出し合うことで、多くの学びを得ることができた。研究員全員の大きな財産になったと感じている。

一方、町内すべての小中学校や家庭に研究内容等を発信することはできたが、実践のレベルまで浸透したとは言い難い。今後、研究員を中心に各学校の主題研究とリンクさせる取組を続けなくてはならない。学力向上の最終目標は、自分自身と自分の生きる社会全体を幸せにすることである。具体的な数値を伸ばすことも大切であるが、それ以上に勉強する楽しみを知り、周囲の友達と協力しながら、よりよい社会づくりを目指す児童生徒を育成することの意義は大きい。町内すべての子ども達の幸せのために、我々教師はもっと日々の研鑽に努めなくてはいけない。今回の研究を通して、学びの大切さを実感できた１年間であった。

【　引用・参考文献　】

・　「まちだの教育」　東京都町田市教育委員会
・　「新たな学びに関する教員の資質向上のためのプロジェクト」　次世代型教育推進センター
・　「授業を磨く」　田村　学　東洋館出版
・　「授業の見方」　澤井　陽介　東洋館出版
・　「学力を問い直す」　佐藤　学　岩崎ブックレット
・　「平成２８年度　教育研究報告書」　高鍋町教育研究所

【　研究同人　】

所　　長	島埜内　遵	
教育対策監	黒木　倫徳	
研究指導員	黒木　俊和	
高 鍋 東 小	田代　裕一	川原　裕一朗
高 鍋 西 小	中村　健太	向井　永吉
高 鍋 東 中	川邊　恵太郎	安藤　雅英
高 鍋 西 中	染矢　直樹	青木　創